〔特別展　江戸の狩野派展によせて〕

杉田玄白と江戸狩野派

小浜藩酒井家の藩医であった杉田玄白は、蘭学の先駆者として大きな功績を残しました。特に、前野良沢らの同志とともに、オランダの医書『ターヘル・アナトミア』を翻訳し、安永三年（1774）に『解体新書』を著したことで知られています。玄白の回想録、『蘭学事始』には、『ターヘル・アナトミア』に掲載された解剖図の正確さに感銘を受けたことが、翻訳を志した最初の動機であったと記されています。挿図の具体的なイメージは、習熟していない和蘭語の内容を理解する上で重要な手引きになります。翻訳書の刊行にも、銅版画の精緻な挿図を正確に写すことが必要です。この時期に、江戸で西洋風の絵画を描いた絵師が活躍し、現在では、江戸洋風画派と呼ばれていますが、その誕生と蘭学の発達は深く関わっています。玄白も江戸洋風画派の絵師と親しく交流していました。『解体新書』の挿図は、秋田藩士であった小田野直武が描いています。その前年に、直武は秋田藩から「銅山方産物他所取付役」に任命されて江戸に上り、洋風画を蘭学者、平賀源内に学んだと伝えられます。文化九年に、蘭学者であった旗本、石川大浪が八十才の玄白の肖像画を描いていますが、その五年後、文化十四年（1817）四月十七日に、玄白は天寿を全うし、八十五才で亡くなりました。

晩年の玄白は多くの門人を育成し、回想録『蘭学事始』をはじめ、後進のために、数多くの書物を著しました。その中に『形影夜話』があります。文化七年に刊行されましたが、自筆の序文に、享和二年十一月の年記があり、七十才の著作とわかります。この書は玄白が医術に関する質問に答える問答形式で記述されています。その相手は鏡に映った自分の影法師です。玄白は自分の老いた顔を、「顔のさましわみ多く、老のなみた目をうるほし、歯も所々残りて、さもみにくけに神さひたる翁」と記しています。

最初の質問は、医術を学ぶ上での「意」、すなわち、心構えです。玄白は心構えにおいては医術も他の技芸と同様と考え、その模範に絵師、狩野探幽を上げています。玄白には狩野洞白が所蔵する探幽の巻物を見たことがありました。そこには、さまざまな絵画が賛文や落款印章にいたるまで写され、さらに、鑑賞した日時や場所、所蔵者、真偽の鑑定が注記されていました。その巻数が数百を越え、長持にして八棹にいたると聞いて、「今其画を見るに、絵の事は知らざれども、実に目を驚かすこと多し。是ゾ三四百年来の名人とも云うべきか。是才力ありて其志の厚き所、右写留しものにても察し知らる。」と、この作品に表された探幽の才能と、厚い志を賞賛しています。このような探幽の絵画は「探幽縮図」と呼ばれています。「探幽縮図」は、探幽の子孫、鍛冶橋狩野家に伝えられましたが、『古画備考』に記載された狩野養信の談話によれば、その多くが、六代当主、狩野探朴から駿河台狩野家の四代当主、洞春美信へ譲られたことがわかります。洞白愛信は洞春の長子です。同書の系図には、母は狩野典信の娘と記されています。狩野家では、宗家の中橋狩野家をはじめ、鍛冶橋狩野家、木挽町狩野家、浜町狩野家の四家は幕府に仕える旗本格の奥絵師でした。絵師は画業の功績が認められると、医師に准じる資格が与えられましたが、木挽町狩野家の六代当主、狩野典信も安永九年に医員格になっています。この時期には、絵師の社会的な地位は、医師や儒家に比肩されるほど高くなっていました。

玄白の話は、この後、探幽の二人の弟、次弟の尚信と末弟の安信の比較へと展開します。玄白は「尚信は才ありしゆゑにや其画風流なり。安信は才劣りしにや其画雅ならず。是其才と不才とによりて、是非なき所なるべし。譬ば紗綾縮緬と絹紬とのごとし。」と述べ、風流な尚信作品を紗綾縮緬、雅味に乏しい安信作品を絹紬に喩えています。安信に対して随分厳しい批評ですが、玄白は安信の芸術性を低く評価しているわけではありません。話は次のように続きます。「紗綾縮緬は能織物なれど、染色あしくしかも仕立あしき時は、人前へは著しがたし。絹紬は劣りたる織物なれど、品能そめ、仕立上手なれば、人前へ著しても、格別見くるしくなきものなり。牧心斎安信は絹紬のよう成下地なれども、染に骨を折、仕立を上手に心懸しゆえ、探幽尚信にも劣らぬ上手と称せらるるなり。今も識者は其学し所の功力に感じて、目當となして学ぶ人多となり。其雅と不雅とは恥にはあらず。学びし程のいちじるしく顕るるは、その人のほまれなるべし。」。玄白は安信が兄たちに劣らぬ名手になったのは、「不才」を補う精進の賜物であり、それゆえに、見識を備えた多くの者が安信を学ぶのは当然だと述べています。このような玄白の安信観は、安信の著書、『画道要訣』の記載を想起させます。そこには、「凡質画は不如学画といへり。我家に云伝は、天質の器用を以って書出すの妙は妙なりといへり、さはいへと是を貴はす、いかむとなれは後世の法と成かたし。学之至るはくるしみて伝ふれとも、萬代不易の道備て子孫是を受けて失わず、」と記されています。この書は安信が延宝八年に、高弟、狩野昌運に筆記させ、門人に免許状とともに与えた秘伝を記す画論書です。『画道要訣』の記載は、玄白の安信観を裏付けていますが、読書家の玄白は既にこの書を読んでいたのかもしれません。しかし、安信自身、「我家云伝」と述べていますので、兄の尚信も絵画学習に関して同様に考えていたと思われます。また、尚信が精進を怠っていたとも思えません。このような安信像、尚信像は、二人の絵画観や修養の相違ではなく、むしろ、作風自体の相違にもとづくのでしょう。安信の作品には、あたかも、精進を重ねた末に描かれたかのような芸術性が認められるということです。安信は中橋狩野家、尚信は木挽町狩野家の祖です。こうして作られた安信像、尚信像が後に両家の絵師の作風に影響を与えたことも考えられます。

玄白は「風流」、「雅」と賞される尚信よりも、むしろ安信作品に共感を覚えていたようですが、「風流」や「雅」に関心がなかったわけではありません。玄白の日記、『鶴斎日録』には、和歌や俳句を詠み、漢詩を作る玄白の姿がうかがわれます。その寛政三年十月二十九日条に、「あさましの老や□□見し人の（虫）の我見なりけり」という狩野常信の和歌を書き留めています。常信は尚信の跡を継いだ長子です。虫喰いの欠損が多く、意味が判然としませんが、玄白がこの和歌に賦した漢詩、「曾思市（虫）翁今我照明鏡衰老自相同」から類推しますと、常信の和歌には、鏡に写る自分の老いた姿への感慨が詠まれていたようです。『形影夜話』の構想は、この常信の和歌から生まれたのかもしれません。（中部義隆）

四季花鳥図屏風（右隻）狩野安信筆　大倉集古館蔵

季刊 美のたより No.160
平成19年9月30日
発行　大和文華館

Copyright ©2010 The Museum Yamatobunkakan. All Rights Reserved.